

平城京と平城宮



転々とする都

平城京

和銅3年(710)、奈良盆地の北端に造られた平城京が新しい都と定められました。元明天皇が律令制にもとづいた政治をおこなう中心地として、飛鳥に近い藤原京から都を移したのです。中国・唐の長安城などを模範とした都をつくることは、当時の東アジアの中で国の威厳を示す意味もありました。

その後、聖武天皇は740年から745年まで、都を転々と移しますが、745年には再び平城京を都としました。そして、長岡京に都が移る784年までのあいだ、奈良の地が都として栄えたのです。この時期を奈良時代といいます。

平城京のメインストリートは、京の南門である羅城門から北にまっすぐのびる幅約74mの朱雀大路です。朱雀大路をはさんで西側を右京、東側を左京といいます。左京には北の方で東にさらに張り出しがありました。平城京は大小の直線道路によって、碁盤の目のように整然と区画された宅地にわけられています。平城京の住民は4~5万人とも10万人ともいわれますが、天皇、皇族や貴族はごく少数の百数十人程度で、大多数は下級役人や一般庶民たちでした。



平城京の条坊

平城宮

平城京・朱雀大路の北端には朱雀門がそびえていました。朱雀門をくぐると天皇の住居であり、政治や国家的儀式をおこなう平城宮です。平城宮の周囲には大垣がめぐり、朱雀門をはじめ12の門がありました。

平城宮の内部にはいくつかの区画があります。政治・儀式の場である大極殿・朝堂院、天皇の住まいである内裏、役所の日常的業務をおこなう省司、宴会をおこなう庭園などです。そのなかでも政治・儀式の場は、都が一時離れた時期を境にして、奈良時代の前半と後半で大きな変化がありました。奈良時代前半に、朱雀門の真北にあった大極殿(通称、第一次大極殿)が、奈良時代後半になると東側の区画で新たに建てられました(通称、第二次大極殿)。これに対して、内裏は、奈良時代を通じて同じ場所にありました。

これらの事実は、40年以上におよぶ発掘調査によってわかってきたことです。このうち、ほぼ正方形と考えられてきた平城宮が、じつは東部に張り出し部分をもつことがわかったことや、その隅に奈良時代の庭園を発見したことなどは、発掘調査による大きな成果のひとつといえるでしょう。



奈良時代前半の平城宮



奈良時代後半の平城宮



復原した朱雀門。朱雀大路に向かって開く平城宮の正門。元日や外国使節の送迎の際に儀式がおこなわれたほか、都の男女が集まって恋の歌を掛け合うのを天皇が見るというイベントもここでおこなわれました。